

地球家族が奏でる幸せのメッセージ

自己紹介



この半世紀に見る創価学会とSGI



大誓堂での勤行会の点描から



インド創価学会の驚異的な発展



特派員として10年間駐在したパナマ

太陽の国スペインメンバーの輝き



横田基地のアメリカ人メンバー

なぜ外国人が仏教を求めるのか



私自身の入会動機と信仰体験



「はげあたま」をモットーに



プロフィール 清水 武 (しみず たけし)



1941年生まれ 早稲田大学卒 NHK学園高校教諭 聖教新聞パナマ特派員 定年後スペインのマラガ大学留学 これまでの訪問43カ国
現在、英語・スペイン語講師、海外留学アドバイザー シニア大衆登録講師 日本ペンクラブ会員 東京都観光ボランティア

——地球家族が奏でる幸せのメッセージ——

はじめに

ご紹介いただきました清水武です。前回、セミナーでお呼びいただいたときには、インドから帰国直後で体調を崩しこちらに来られなくなり大変失礼をしてしまいました。急遽、講演原稿を代読していただいた木津様、ありがとうございました。

今日の会場には太陽会以外の方も、また創価学会の会合に出られるのは初めての方もいらっしゃると思います。そんな皆さまに、これまでに世界 40 カ国余りを回っての見聞や、私の 50 年余りの信仰体験をご報告し、今後の生き方のご参考にしていただけたらと思っております。40 分の時間をいただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

自己紹介

最初に簡単な自己紹介をさせていただきます。住いは青梅線の昭島市です。20 歳で創価学会に入会して 56 年。この 3 月には喜寿、77 歳になります。

現役時代には大学（早稲田）を卒業すると、国立市にある NHK 学園高校の教諭を務め、その後、聖教新聞社（創価学会の機関誌で現在、日刊約 500 万部です）に入り、中南米特派員としてパナマに派遣されました。この特派員だった 10 年間には、北南米大陸の全ての国とヨーロッパを訪れる機会に恵まれました。

そんな現役時代のつながりから、60 歳の定年 1 年目には横田基地の中にある「セントラルテ キサスカレッジ」で英語を、2 年目には南スペインのマラガ大学でスペイン語を学び直しレベルアップに努めました。定年後まだ 20 年から 30 年はあるであろう人生への再投資のつもりでしたが、おかげさまで現在は英語やスペイン語の講師をしたり、SGI（「創価学会インターナショナル」の略称で海外の創価学会を指しています）で大誓堂<レジュメ写真>の勤行会に来日した海外メンバーのアテンドと、海外に出て行く日本人メンバーへの激励やアドバイスなどをさせていただいております。

一方で、定年後のライフワークと定めた文学紀行で世界の名作の舞台を訪ねてきました。この 10 年あまりでシェイクスピアの「ハムレット」、ユゴーの「レミゼラブル」、セルバンテスの「ドン・キホーテ」<レジュメ写真>、トルストイの「戦争と平和」、ミッチェルの「風と共に去りぬ」、モンゴメリーの「赤毛のアン」など計 15 作品の舞台を訪ね原稿を書てきました。

また、昨年からは東京都観光ボランティアの公式スタッフとして新宿駅周辺で来日した外国人のアテンドをしています。2 年後のオリンピックには通訳ボランティアとして貢献できればなんて夢を描いているところです。

はげあたま

さて、こちらにお邪魔して、会場に私と同じような仲間がいることを拝見して親しみを感じています。この頭です。先日、こんなことがありました。

私は年金生活に入ってから、現役時代と違ってできるだけ儉約生活を心がけるようにしています。散髪代もその一つ。床屋さんに行くのをやめ、けっこう手先の器用な家内がハサミを操り、私の頭を刈っています。

とはいっても、大事な行事に参加するときや、大切な人と会わなければならないようなと

きには、やっぱり床屋さんに行くんですね。

でも、この頭です。<頭を下げて指でさす> 他のお客さんよりも髪の毛のある部分がぐっと少ない。そこで散髪が終わり料金を払う段になって、店主に言ってみたんですね。

<落語の話し方で>

「マスター、ほらご覧のように、私の頭はほかの人の髪の毛の量の半分以下ですよ。禿げている部分はまったく手をかけなくてもよいし……。だから料金も少しは割り引いてくれませんかねえ」。と、そこの主人、なんて言ったと思いますか？

「旦那さん、そんな無理をおっしゃらないでくださいよ。確かに旦那さんの髪の毛は少ない。ですから、私としては一本たりとも抜いたり傷めたりしてはいけないと思って、大変な気を遣ってハサミを動かしているわけですよ。逆にこちらが割増料金をいただきたいくらいですよ」

敵もさるもの、上手をいくもんですねえ。あの中高年のアイドル、綾小路きみまろさんだったらこう言うでしょう。「中学時代はイガクリ頭。高校時代は髪もふさふさの美少年でした。あれから60年——。昔は目の前が明るかった。今、明るいのはこの頭だけ……」ともあれ、頭が輝いていること即、人生が輝いていることには通じませんが、でも、頭の輝きのように人生も輝かせていきたい、というのが今日の私の話しのテーマであります。

この半世紀に見る創価学会とSGI

最初に申し上げましたように、私は半世紀以上の間、創価学会の中で仕事と活動をし、実態も見てきました。今、海外のメンバーは192カ国地域に広がっています。

あの広いアフリカ大陸のほとんどの国にも仏教徒が誕生し活躍しています。そしてSGIの研修会にも来日しています。彼らはまずアフリカから宗主国だったパリやロンドンに出て、そこからまた10数時間かけて成田に飛んで来るわけです。もちろん、旅費も滞在費もすべて自己負担です。すごいことですよ。

かつてSGI会長の池田先生が「21世紀はアフリカの世紀だ」と言われましたが、まさに今その時代がとうとうと始まっているのを実感します。

それと私が感銘を深くしているのは、かつて社会主義の大国だったロシアでも、首都モスクワで、旧都サンクトペテルブルクで、また極東のウラジオストックなどでSGIメンバーが仏教を語り合う座談会を開いていることです。

大誓堂での勤行会の点描から

そんなSGIメンバーの状況が集約された場面の一つが大誓堂での勤行会です。本年11月に完成5周年を迎える大誓堂の勤行会には毎日、約1000人あまりの日本の学会員と共に20人から100人の海外メンバーも参加しています。国の数で言うと少ない日でも5・6カ国、多い日は十数カ国からやってきています。

英語を初めスペイン語、ポルトガル語、フランス語、イタリア語、タイ語、インドネシア語、韓国語、中国語（北京語と広東語と2種類ある）と言葉も文化も違います。でもみんな、日本の学会員とまったく同じように「ニジセソソ……」と経文を読み題目<南無妙法蓮華経>を唱えています。そんな姿を見ると、まさに平和を願い行動する地球家族の連帯が感じられて深い感銘を覚えます。

遠くは日本の反対側ブラジルから20数時間と10数万から数十万円の旅費をかけて来日するメンバーの熱い求道心にいつも感動しているところです。

インド創価学会の驚異的な発展

来日する海外メンバーで最近、特に注目されるのはインドです。

インドに行ったことがある方はいらっしゃいますか？

インドの人口はどのくらいでしょうか？ そう約 13 億ですね。日本の人口が高齢化で減少しているのに対し、インド人の半分は 30 歳以下という若さあふれる国なのです。

インド人はもともと彫りが深く哲学的な顔で、女性はカラフルなサリー（肩掛け）をしているのでとても目立ちます。そして時には 30 人、40 人のグループで来日、また昨年は青年部員 200 人が研修会で来日するようなこともありました。

一昨年の 11 月、私はインドを訪ねました。この時は文学紀行ではなく、首都デリーの見学やタージマハールなどの観光がメインでしたが、デリー近郊にある創価菩提樹園も訪問、またインド創価学会の中心者の一人からも話を聞くことができました。<レジュメの写真>

詳細は 1 年半前の講演原稿<臨時に木津さんに読んでいただきました>でご報告していますので省略させていただきますが：

56 年前、1961 年に池田先生が初めてインドを訪れたとき学会員はゼロでした。釈尊が布教した国でありながら途中から仏教が衰退しヒンズー教やイスラム教が広まったという歴史のあるインドで今、生活に根ざし、蘇生した仏教がインドに力強く流布しつつある。その発展の勢いは素晴らしく、現在、インド創価学会は 15 万人を超えた、とのことです。

インドは人口ではまもなく中国を抜き、また IT 産業を中心に経済力でも 50 年後には世界のトップに躍り出るだろう、との分析もあります。インドの国自体の発展、それに合わせるようにインド創価学会の素晴らしい発展を見るにつけ、今まさに「インドの時代」がやってきつつある、との実感を強くした次第です。

特派員として 10 年間駐在したパナマ

さて、話しはアジアから中南米へ、そして少し過去に飛びます。私は 1970 年代後半から 80 年代にかけて 10 年間、聖教新聞のラテン・アメリカ特派員としてパナマに駐在しました。あのパナマ運河のある国ですね。北南米大陸の地峡で一番狭くなるところから、太平洋と大西洋を結ぶ運河ができた。

南北アメリカの二つの大陸と世界の二大洋を運河で結ぶことから「世界の十字路口」と呼ばれ、パナマ SGI の機関誌も「プエンテ・デ・パス」（スペイン語で「平和の架け橋」という意味です）とのタイトルとなっています。

私が赴任した当時、メンバーは 1000 人弱でまだ草創期にありました。でも五つあった支部の支部長は、それぞれパナマ大学教授、裁判官、テレビ記者、パナマ運河に勤務する公務員、それに原住民族だったクナ族の壮年と多彩でした。国民の 9 割がカトリック教徒の中でスペイン語が母国語の彼らが仏教徒として頑張っているのは感動的でした。

池田先生はパナマを 3 回訪れメンバーの激励のほか、大統領との会見やパナマ大学訪問など文化教育交流も進めてきています。

20 世紀の終わりには、パナマ運河とその両側の土地がアメリカからパナマの国に返還されました。そこに国立パナマ大学の新キャンパスができた。そしてキャンパス入り口にある大きな公園が「池田大作公園」と命名されたのです。<レジュメ写真> パナマに限らず、

アメリカやブラジルなど池田先生やSGIを顕彰してその名前を冠した道路や公園は今や世界の各地に数多くあります。

私はすでに日本に帰国し定年になっていたのですが、嬉しいニュースにボランティアとしてその開園式の取材とメンバーの激励に行ったのです。2007年、ちょうど10年前のことでした。

そして昨年には、そのキャンパス内に、池田先生作詞の「母」の歌詞が台座の名盤に刻まれた「母子の像」が設置されました。{♪母よ、あなたは～}との出だしの「母」の歌は、日本の婦人部員の皆さんのすべて、また壮年、青年部員の大部分の方も知っている、命をはぐくむ母の尊さを称えた感動的な歌詞でありメロディーですね。

「母の安らぎがあって平和はある」といった万国共通の理念に大学の関係者が共鳴して建てられた経過があるとのことでした。

パナマSGIは今9本部26支部に発展し、国内60会場を中継で結ぶ御書講義も毎月開催するまでになっています。

私事で恐縮ですが、パナマ日本人学校の校歌の作詞は私です。開校まもなくで校歌がまだなかった学校が、パナマに駐在する日本人に呼びかけ、40作品余りの応募があったなかで最終的に私の作品が選ばれた次第です。今も体育館の壁に校歌が掲げられています。

太陽の国スペインのメンバーの輝き

ところで中南米の国々で使われている言語は、ブラジルのポルトガル語とハイチのフランス語を除き、すべてスペイン語です。

私は特派員として赴任したとき35歳。スペイン語はゼロからのスタートでした。でも、現地の機関誌の編集や、取材で10年間近く中南米の国々を回っている間になんとかマスターできましたが、いわゆる現場で「たたき上げ」のスペイン語でした。

そこで定年になると、せっかく身に着けたスペイン語を系統立てて勉強しておきたいと、南スペインのマラガ大学に留学した次第です。ちょうど1年間。ここでも座談会や勉強会に参加しました。もう15年前になります。当時、スペイン全土で500人ほどだったメンバーは今5000人を超えています。入会するメンバーの99%は生粋のスペイン人ですが、ここでは一人の日本人の体験をご紹介したいと思います。

それは松本良さんといって現在40代後半です。松本さんは大阪大学の哲学科卒業でしたが、フラメンコが好きでした。大学を出ると本場スペインのセルビアに留学しました。才能があったのでしょう。すぐに頭角を現し、まもなくフラメンコが本場のスペインでフラメンコ教室を主宰するまでになりました。やがてテレビにも出演しスペイン語も達者になり、関西弁を混ぜたトークがとても人気を呼んでいました。

SGIの活動も意欲的で男子部の南方面の責任者だった当時、あの広いアンダルシア州（日本の東北6県ほどあります）、を車でメンバーの激励に回っていました。私も留学中の一時、彼の車で一緒に活動に加わったものでした。

彼のフラメンコは評判を呼び、5年ほど前から東京また大阪での凱旋公演も実現しています。昨年は新宿・伊勢丹会館の舞台上で、ギター演奏家やカンテ（歌手）を従え激しく踊る松本さんに「ブラボー」と大拍手を送ったものです。

その松本さん自身の入会は、あの阪神淡路大震災の直前だったといえます。そして大震災で救急物資や食料が足りない。道路の交通網はズタズタで一般車もトラックも通れない。そ

んななか、大阪の男子部がバイク隊を結成し緊急物資の輸送に貢献した。また自分が被災者でありながら救援活動に必死に取り組む学会員の姿に胸を打たれて「学会はすごい！」と自分の信心を確立した。「この大災害のときの創価学会の対応、男子部の姿を見て創価学会は本物だ、と再認識した。私の信心の原点です」との言葉でした。信仰の動機を聞きながら私も思わず感動した次第です。

東日本大震災のときの学会員と学会の対応も同じでした。創価学会は今、地域でなくてはならない「安全と安心の灯台」になりつつあるように私には思えます。

この1月には、創立500年以上の歴史を誇るスペインのアルカラ大学から、池田先生に名誉教育学博士の称号が贈られました。今、松本さんは今、スペインSGIの芸術部長を務めています。

横田基地のアメリカ人メンバー

ここで、世界が宗教をどう位置づけているか、身近な一例として私が担当している国内の外国人メンバーの状況をお話してみたいと思います。

横田基地に入ったことがある方はいらっしゃいますか？

ごく最近では、トランプ大統領が成田でも羽田でもなく、米軍の横田基地に降りたことでテレビにも何回か映りましたよね。

私は特派員から帰国してまもなく基地で働くアメリカ人の組織の支部長に任命されました。それから1年ほどして、サンタメリカは仏教団体・創価学会の支部の一つとして、横田基地の宗教局に正式に登録されました。これにより、私たちはキリスト教やユダヤ教とまったく同等に扱われることになり、次のような特典が与えられたのです。前回の講演原稿で触れましたが、とても大事なポイントなので再度ご紹介したいと思います。

- チャペル(教会)の施設を、いつでも会合などに使用できること。
- 病院や図書館など公共の施設に、仏教またSGIの書物やパンフレットを置くことができること。
- 基地で発行している新聞や基地内の放送に必要なお知らせを載せられること。
- 遠くでの行事に空軍のバスが無料で提供されること。などです。

私たちは毎月の座談会をチャペルで開いています。基地の図書館には、日蓮大聖人の仏法またSGIを紹介した本が並んでいます。新聞やラジオでの広報や、空軍のバスによる遠隔地での行事も当時はありましたが、基地の縮小とともにメンバーが少なくなった現時点ではありません。でも、いつでもできる状況にはなっています。

これらは宗教そのものを大切にす民主的なアメリカの風土、機構からくるものです。ともすると宗教をうさん臭いものと見る人の多い日本とはずいぶんの違いだと思います。

しかも今、アメリカ国防総省の本庁舎ペンタゴン（英語で「五角形」の意味）には、各宗教が自由に行事を持てる期間があり、2年前からアメリカSGIではそのペンタゴンの建物の中で仏教セミナーを開催しています。会場には前線の将校なども出席しSGIへの理解を深めているようなのです。<レジユメのWorld tribuneの紙面>

なぜ外国人が仏教を求めるのか

ところで、インドはもともと仏教有縁の国でした。でもアメリカのように、本来がキリス

ト教の国、また歴史や文化・社会体制の違う国々の人がなぜ仏教をたもつにいたったのでしょうか？ いろいろな要因がありますが、一つは「三証」から見るができると思います。
<板書>文証、理証、現証、という三つの証拠。つまり教えを書かれたものがあるか（文証）、教義が道理に合い矛盾していないか（理証）、そしてその宗教を实践した結果、現実生活が変わっていくか（現証）、といったものです。

文証で言えば、私どもには御書（宗祖・日蓮大聖人の書かれた論文やお弟子への手紙をまとめたもの）があります。欧米ではバイブル（聖書）が該当しますね。

理証について言えば、仏法は、因果の法則、生命の永遠、を根本に説かれており、矛盾はありません。

そして現証とは、宗教を实践した結果の証拠です。つまり信仰体験。これは、ここにいらっしゃる学会員のお一人お一人がつかんでいるものです。

次にロシアのように、なぜかつて社会主義だった国、つまり「物を中心に考え平等に重きを置く、そして宗教を否定していた」国の人々が仏教を信ずるようになったのでしょうか。

それは 仮にモノの面で平等になったとしても（現実にはなかなかそうならないですね）、人間本来の悩み、家庭不和、病気との闘いなど、仏教が説く「**生老病死**」**<板書>**という人間の根本的な悩みは、どんな社会体制に住む人間でも避けることはできないからです。

私たちの唱えている南無妙法蓮華経は、宇宙のリズム・法則であり、私たちの生命のリズム、法則です。わかりやすく言えば、ニュートンが発見した万有引力の法則と同じように、この生命の法則は宇宙に厳然とある法なのです。

約 2500 年前、インド（現在のネパール）に生まれた釈尊は、その生涯に膨大な量の教えと経典を残されました。その中で、最後の 8 年に説かれた法華経が最高の教えといわれていますが、実はその法華経の教えの究極が南無妙法蓮華経なんです。

他にも信心した友人が変わっていく姿に引かれて、とか入会の動機にはいろんな要素がありますが、海外の人の良いところは、見栄とか体裁、外聞を気にせず、よいものはよいと素直に認め実践することなんです。日本人の場合だと、よいと分かっても、自分の意志よりも、周囲の目を気にしてなかなか踏み切れない、といった面が往々にしてあるのを私は感じています。

私自身の入会と信仰体験

この会場には初めて創価学会の会合に参加された方もいらっしゃるかと思います。そこで、最後に、私がなぜ入信したか、またその後どんな人生を歩んできたかについて少しお話してみたいと思います。

長野県の進学高校を卒業した私は大学受験に失敗。その直後に母が脳溢血で倒れ長期入院し家の経済事情から進学を断念せざるを得ず、上京し都内の小さな自動車部品販売会社で働いていました。そんなある日、会社の女子社員に創価学会の座談会に誘われたのです。出席してみると仏教哲学の一部が語られていました。話はやがて私を中心に展開していきましました。私は率直に抱えている悩みや大学進学の夢を話しました。

当時、私は「赤旗」を購読するなどそれなりに社会について考えていました。周囲の言うことをすべては納得できなかったのですが、「饅頭がうまいかまずいかは食べてみなければわからない。宗教もまずやってみて自分で体験をつかんでみてはどうか」との勧めで、と

もかくも“試してみる”ことにしたのです。

そのころの私は住み込みで会社のビルの4畳半程の部屋に同僚と2人で寝ていました。時代は東京オリンピック（1964年）を前に、日本の経済は右肩上がり。東京へは地方から大勢の高卒の若者が働きに出てきて、会社の仲間たちもみんな地方からでした。

月給は1万円そこそこ。仏壇を買えるようなゆとりはありません。先輩のアドバイスで枕もとの壁にワイシャツの箱を画鋏で貼り付け、その中に御本尊を安置しました。勤行を始めると、会社の仲間が冷やかす半分に覗き見にやってきました。

しかも、当時のマスコミは学会の悪口をさかんに書いていました。「創価学会は貧乏人と病人の集まりだ!」。確かにそうした一面はあったと思います。でも、その批判に対して先輩の次の言葉は私にも強い確信を与えてくれました。

「偉そうなことを言っているけど、じゃあ、そう言う本人は、貧しい人や病気で苦しんでいる人にどんな救いの手を差しのべてきたんだい!？」本当にその通りだと思います。一番、苦しんでいた庶民に手を差しのべてきたのが創価学会だったのです。

入信した私は慣れない勤行（法華経の一部を読む）と唱題（南無妙法蓮華経と唱えること）を始めました。その一方で、仕事をしながら必死の受験勉強もしました。そして半年後には幸いにも早稲田大学商学部合格することができたのです。

でも仕事が経理関係で大事な立場にあったため、すぐに会社を辞めるわけにはいかなかった。幸いに当時の学部は昼夜開講制だったので、仲間より早い時間に退社して大学へ。授業から帰ると再び会社で残った仕事を夜11時、ときには深夜まで取り組みました。

そんななか、思いもかけなかった嬉しいことが起こったのです。簿記も会計科目もある大学の授業が現場の業務にも通じているということで、なんと4年間の授業料を会社が負担してくれたのです。まさに信心の功德と言えそうです。

やがて経理関係の後継者ができて社長も快く退社を了解してくれたので、私は大学を卒業するとNHK学園高校の教諭の職に就きました。

その後、聖教新聞の特派員として主に中南米の国々を回っていましたが、大変だったときはいつも題目が困難を乗り越え、道を切り開く力になってきました。

うつになり人生のどん底へ

60歳で定年後は最初に述べましたように、南スペインのマラガ大学に1年間、留学しました。ところが帰国の半年後、私はうつになり、いつ死んでもおかしくないほどの人生最悪のどん底に陥ったのです。

この歳で、まさか自分がうつになるなんて信じられなかった。妻も「そんなことは絶対にない」と信じようとしませんでした。でも病状はまさにうつ症状そのものでした。

何に対しても自信がなく、決断力に欠け、夜もよく眠れなくなった。すべてが灰色に映り、生きていること自体がなくなり、時に自殺の考えさえ浮かぶようなこともありました。

原因はわかりませんでした。自由でのびのびとしていたスペインから忙しい日本に戻った環境の変化からか、子供の結婚問題等いろんな心労が重なった故からか、あるいは自分が人一倍まじめで心配性である性格からきたものなのか……。

そして、なんとというめぐり合わせなのでしょう！

その体調が最悪だった翌年の初め、前年の秋に頼んでおいた仕事のオファーが重なるように続いたのです。一つは、大学の通信教育部の英語講師。一つはNHK学園高校の添削講

師。一つは昭島市内のカルチャーセンターのスペイン語講師。さらに、大学時代の友人が社長の会社から「社長室参与で」との話も受けました。しかしながら、これらの仕事のオフーも、体調の悪さを理由にすべて断わらざるを得なかったのです。

昭島市内の神経科病院に通い、何回かは都内の高名な専門医も訪ねました。また精神科のドクター部員のところも訪ねました。

睡眠薬を処方され、強すぎたのか寝ていると身体が硬直したようになってしまいました。病院に行く途中で、前から来る自動車が自分をひいてくれないかなあ（自殺すると保険が出なくて残された家族が困る、なんて妙なところだけ意識が残っていて）、とか、妻にも心配をかけ続けた辛い日々が続きました。

どの仕事も断ってしまった後は、未来に絶望的な思いを抱いていました。朝起きると、何をすることも長い 1 日が始まる。夜になるとまた暗く長〜い闇が始まる、と悶々とした日々でした。一時は仕事さえあれば、駅のトイレ掃除でも、とまで思うこともありました。

そんなある日、お天気キャスター倉嶋厚さんが自らのうつ体験を綴ったエッセイを読む機会がありました。「やまない雨はない、妻の死、うつ病、それから・・・」。倉嶋さんはここで「うつ回復の大事なポイントは 100% 完璧を求めないこと。8割を目指すくらいでいい。極端な例、人生 8 勝 7 敗でも勝ち越しなんだから」と強調していました。。それを自分にも言い聞かせていったところ、少しずつ心も落ち着いていったのです。

シルバー人材センターの仕事から立ち上がる

こうしたなか、やる気さえあれば誰でも受け入れてくれるシルバー人材センターの存在を知り会員として登録、まず、自転車整理の仕事から始めたのです。

J R 青梅線 昭島駅南口の駐輪場。朝 6 時、たばこの吸い殻の落ちている駐輪場の掃除から始まりました。「おはようございます」「いってらっしゃい」と利用者への声かけや、身体を動かしていることが治りかけた病状から完全復帰への大きな力になっていたと思います。

でも仕事は単純で、勤務も週 3 日か 4 日、1 日 4〜5 時間だったので、もう少し何かしなくては、と立川のハローワーク に行ったところ、偶然にも人材派遣会社が募集する都立高校のティーチング・アシスタント（先生の助手ですね）との仕事を紹介されたのです。続いて、英検受験者の指導、ということで都立日野高校と砂川高校へ。ここから現在に続く仕事が開けていったのです。

しかもそれ以来、以前にも増して元気になり意欲的になった。文学紀行を始め、新聞・雑誌に寄稿し、英語やスペイン語の講師もできるようになった。いわゆる「**変毒為薬**」<板書>（毒を変じて薬と為す）できたのです。

私の場合、幸いなことに病院での的確な療法と薬、妻の支えと祈り、関係者の励ましで 1 年弱でその苦境を乗り越えることができました。病気の間も勤行の大切なことは意識して取り組んだのですが、集中できず、時にはリン棒で自分の頭を血がにじんできるとほど激しくたたき、といったこともありました。

今思うに、うつを克服できた最大の力は、それまでの題目の蓄積があったからと、確信しています。人生極限の土壇場で蓄えてきた題目が自分を救ってくれた、との実感なのです。

一般に完治がなかなか難しいという病気です。私の場合、短期間でそれを乗り越えることができたのも、根底に信仰という強い軸があったからこそ、と思っています。

題目から挑戦の勇気が湧く

50年余りの信仰の中では大変なときもありました。仏法は魔法ではありません。創価学会の信心をしてもすぐに願いが叶い、すべてが順調になるとは限りません。自身の過去からの宿業という問題もあります。でも、何があっても題目でその悩みや問題を乗り越えようとする勇気が出てきます。「ようし」と挑戦の心が生まれてきます。生命力が出てきます。それがスゴイのです。

私も入会当時は会社の寮での勤行が恥ずかしかった。でも朝、題目を唱えていると命が躍動してくるようでした。いやな仕事でも前向きに取り組めた。その連続が現在の人生につながってきたと感じているところです。

創価学会の「創価」とは価値の創造を意味しています。信心とは無限の向上。どれだけ自分を高め、能力を発揮し人生を充実させていくか、社会に貢献していくか——池田先生はこれを「人間革命」〈板書〉との言葉を使い表現されています。

一方、世界平和に貢献も創価学会の活動の大きな柱です。昨年末のノーベル平和賞に I C A N (International Campaign to Abolish Nuclear Weapons) が選ばれ、その支援団体として授賞式に S G I の代表も招待されました。またローマのパチカンではフランシスコ法王も S G I 代表団との懇談で、S G I の活動を高く評価していました。

このように創価学会員の生き方は、個人としても団体の一員としても、人間として最も理想的で崇高な生き方だと私は思っています。

「はげあたま」をモットーに

先日、大手飲料メーカー・サントリーの新聞広告が目にとまりました。ページいっぱい大きな文字で「60代の若者たちへ」のタイトルに続き「この先をどう生きるか。しまっておいた夢を取り出してみないか」と脚本家の倉本聰氏が呼びかけていました。とても刺激的なタイトルですよ。

人生100年時代においては60歳も若者なのです。何かを始めるのに遅いということはない。この長寿化時代に老後をどう生きていくかが問われています。信仰している私たちには「広宣流布」という壮大な夢があります。私自身は、創価学会創立100周年の2030年をその最終目標として目指しているところです。

最後に私のモットー「ハゲアタマ」をご披露しておきたいと思います。髪の毛が少なくても残念ながら散髪料金は安くならない。そこで私は「定年後を輝いて生きる」ために、率先してこの「はげあたま」的生き方を心がけています。「はつらつ」と「げんきに」「あかるく」「たのしく」そして「まあるく」です。〈板書〉特にこの最後の「まあるく」が大事ですね。人生、すでに甘いも辛いも経験し、角が取れて「まあるく」なっているはずですから、今さら人間関係でギスギスしてもしようがない。穏やかに「まあるく」いくことです。つまらない顔をしていると、つまらない人生になってしまいます。

題目を唱え、生命に弾むような勢いがあれば、必ず人生も躍動してきます。私はこれからもこの「ハゲアタマ」をモットーに生きていきたいと思っています。今、髪の毛のふさふさの方も、どうぞこのモットーの実践だけはお勧めです。人生が明るく楽しくなってきます。

世界への仏法の広がり、文化比較から禿げ頭論へ、話しはあちこちに飛んでしまいましたが、皆さまのご参考となればこんな嬉しいことはございません。

以上で私の話を終わらせていただきます。長時間のご清聴ありがとうございました。